

# まだ見ぬ鈔本『論語義疏』(六)

影 山 輝 國

これまで、縷々述べてきた所在不明の『論語義疏』鈔本であるが、いつたい何本くらいあるのか、まとめて見よう。

## 一 有不為齋本

伊藤介夫(一八三三—一九二二)の有不為齋文庫旧蔵本。全五冊、每半葉九行、毎行二十三字。慶長(一五九六—一六一五)・元和(一六一五—一六二四)以後のものと武内義雄はいう

## 二 皎亭本

内野五郎三(一八七三—一九三四)の皎亭文庫旧蔵本。全十冊、每半葉九行、毎行二十字。室町末期写と川瀬一馬はいう。

## 三 文之本

文之玄昌(一五五五—一六二〇)の筆。卷四、卷五のみ。右、一から三については、拙稿「まだ見ぬ鈔本『論語義疏』(二)」、『実践国文学』第七十八号 二〇一〇年一〇月)を参照されたい。

## 四 求古楼白紙裱紙本

每半葉九行 毎行二十字  
求古楼は狩谷掖斎(一七七五—一八三五)の文庫である。以下五、七の三本を加え、掖斎は四本の鈔本を持っていた。

五 求古楼大通本

每半葉八行 每行二十字

六 求古楼千秋閣本

每半葉十行 每行十八字

この写本には「千秋閣」「長直之印」「長氏」の三印がある。

七 求古楼有図本

每半葉八行 每行二十字

八 求誨堂藏古鈔零本

村山敬応の所蔵本。(村上敬応は未詳)

九 岡西徳瑛藏古鈔零本

岡西徳瑛は、伊沢蘭軒(一七七七一—一八二九)の門人で、いわゆる「蘭門の五哲」の一人、字は君瑤、通称は玄亭という人である。

右、四、九については、拙稿「まだ見ぬ鈔本『論語義疏』(三)」(『実践国文学』第八十二号 二〇一二年一〇月)を参照されたい。

十 福山藩本

狩谷掖斎が求古楼展観第六集として出陳した古鈔本。拙稿「まだ見ぬ鈔本『論語義疏』(二)」(『実践国文学』第八十号 二〇一一年一〇月)で言及した。

十一 容安書院蔵本

每半葉九行 每行二十字

『経籍訪古志』は応永(一三九四—一四二八)間の鈔本という。迷庵市野光彦(一七六五—一八二六)が『正平本論語札記』一卷を書く際、校勘に用いたもので、後に洪江抽斎(一八〇五—一八五八)の容安書院蔵となった。抽斎の文庫は柳原書屋ともいわれ、『卿雲輪困附録』の「皇侃義疏 古抄本 柳原書屋蔵」も同じものである。拙稿「まだ見ぬ鈔本『論語義疏』(二)(三)」を参照されたい。

十二 弘前星野某蔵本

『経籍訪古志』に以下の如く著録される。

每半面八行、行二十字、注双行、第一卷末有知寺真慶題字、此本攷紙質字様当永禄間鈔本、按、世伝旧鈔義疏每篇首皆引(邯)邢疏文、不能無疑焉、此見此本、

第二卷八份子曰射不主皮条、馬融注射有五善下、及以熊虎豹皮為之下、引邢疏文俱冠裏云字、乃知旧鈔義疏原于唐卷子本、承學者以邢疏文錄之背紙、而後人伝写誤混之正文、遂又記裏字以為識別、於是益知此本之為最可貴重也、

(每半面八行、行二十字、注双行、第一卷末に知寺真慶の題字有り、此の本、紙質字様を攷ふるに当に永祿間(一五五八—一五七〇)の鈔本なるべし、按ずるに、世に伝ふる旧鈔義疏は毎篇の首に皆邢疏の文を引く、疑ひ無きこと能はず、此に此の本を見るに、第二卷八份子「子曰はく射は皮を主とせず」の条、馬融注の「射に五善有り」の下、及び「熊虎豹の皮を以て之を為る」の下、邢疏の文を引いて俱に「裏云」の字を冠す、乃ち知る旧鈔義疏は唐卷子本に原づき、學者邢疏の文を以て之を背紙に録するを承け、而して後人伝写するに誤りて之を正文に混じ、遂に又た「裏」字を記して以て識別を為すを、是に於て益此の本の最も貴重すべしと為すを知る、)

いま、所在の判明する三十六本の鈔本(「まだ見ぬ鈔本『論語義疏』(一)』」を参照されたい)と比べてみると、每半葉

八行、每行二十字であり、第二卷八份子「子曰はく射は皮を主とせず」の条、馬融注の「射に五善有り」の下、及び「熊虎豹の皮を以て之を為る」の下、邢疏の文を引いて俱に「裏云」の字を冠するのは、上原本のみである。但し、上原本には第一卷末に「知寺真慶」の題字はないので、弘前星野某藏本とは別の鈔本である。「知寺真慶」の「知寺」とは、寺院の雑事や庶務をつかさどる「知事」のことであろうが、「真慶」とは誰のことかわからない。邢疏の文を引いて俱に「裏云」の字を冠することについては、島田翰が『古文旧書考』で同様のことを述べている。

### 十三 松本本

明治十四年(一八八一)から明治二十年(一八八七)まで清国公使随員として日本に滞在した姚文棟(一八五三—一九二九)のために、稲垣天真が購入した松本家所蔵の『論語義疏』古鈔本である。この鈔本は姚文棟から、清国の総理衙門に進呈され、姚文棟の子である姚明輝によれば、その後南京図書館に入った可能性が強いのであるが、現在はその所在不明となっている。

### 十四 松田本

南京図書館には、もう一本『論語義疏』鈔本があったは

ずである。それは、もと鳥取藩の医者、のち東京府士族、宮内省御用掛であった松田本生（一八一四—一八八三）の所有していた鈔本である。これが杭州丁氏八千卷楼を経て、南京図書館に入った。南京図書館の前身である江蘇省立国文学図書館の目録にも記載され、「松田本生」「本生」「千秋閣」の三印が捺されていることがわかつている。しかし、これも残念ながら現在は行方不明となっている。

右、十三、十四については、拙稿「まだ見ぬ鈔本『論語義疏』（四）」（『実践国文学』第八十四号 二〇一三年一〇月）及び同（五）（『実践国文学』第八十六号 二〇一四年一〇月）を参照されたい。

#### 十五 近藤正斎本

書物奉行であった近藤正斎（一七七一一八二九）が所蔵していた鈔本である。『正斎書籍考』卷三、経部「論語義疏」の項目に、「皇朝古鈔本数通アリ、予モ室町季世ノ古本ヲ収儲ス」また、「予室町季世伝写ノ義疏及ビ諺解ヲ儲藏ス」と書かれている。

#### 十六 金沢文庫本

傅增湘（一八七二—一九四九）著『藏園群書經眼録』に

論語義疏十卷 魏何晏注 梁皇侃疏

日本室町時代写本、半葉九行、行二十字。高七寸七分、寛五寸六分。鈐有「金沢文庫」印。

と見えるもので「金沢文庫」という印が押してあるという。しかしこの鈔本の存在は極めて疑わしい。

右、十五、十六については、拙稿「まだ見ぬ鈔本『論語義疏』（五）」を参照されたい。

#### 十七 暦応鈔本

島田翰（一八七九—一九一五）『古文旧書考』に記載。川越の蔵書家新井政毅（一八二八—一九〇三）の所蔵とされる。暦応年間（一三三八—一三四二）の書写とされ、卷子本を冊子に改装し、紙背に邢疏が記されていたというが、この本の存在は極めて疑わしい。

#### 十八 永正鈔本

島田翰『古文旧書考』に記載。新井政毅の所蔵とされる。永正年間（一五〇四—一五二二）に書写されたものという。

十九 中丸呂本

武内義雄「梁皇侃論語義疏に就いて」(『支那学』第三卷二・三・四号 大正十一年十一月・十二月・大正十二年一月、のち「校論語義疏雜識」と改題し『老子原始 附諸子攷略』弘文堂書房 大正十五年十月、また『武内義雄全集』第一卷 角川書店 昭和五十三年七月所収)に記載。新井政毅の所蔵とされる。明治二十二年に中丸呂という人の手に渡ったらしい。

二十 玄昌本一卷

新井政毅旧蔵の『尚古先賢遺蹟纂摹』(川越市立中央図書館現蔵)に

論語義疏古鈔本一卷 卷尾文明五癸巳於江州飯高山写之 玄昌

とある。文明五年癸巳は西暦一四七三年であるから、この玄昌は文之玄昌(一五五五—一六二〇)とは別人であろう。

二十一 奈佐勝臯蔵ヲコト点附本

二十二 平子彬書写本

右、二十一、二十二の二本は奈佐勝臯(号隅東、姓日下部、通称九左衛門)の「山吹日記」に

我家に義疏の古鈔本二通をつたへもたり。一通はをこ  
と点あり。紙のさま筆の跡も三百年あまりにも成ぬへ  
きものなり。いま一通は平子彬義質か写せし本也。又  
相しれる人のかり一本ををさむ。その奥書に文明十四  
年足か、にてうつせしことかければ、この学校のをも  
のしたるならん。

と見える。ここから奈佐勝臯は、ヲコト点の附いた三百年  
あまり前の鈔本一通、荻生徂徠の弟子の平子彬(一六八九  
—一七五六)、すなわち三浦竹溪(名義質)が写した一通、  
さらに、知人から借りた文明十四年(一四八二)の奥書の  
ある一通、合計三本の鈔本を所有していたことがわかる。  
このうち、文明十四年の奥書のある鈔本は国会図書館本で  
ある可能性が高い。この鈔本の第十卷末に「文明十四年寅  
年三月於足利官濃山口茅檐下書之(文明十四年寅年三月、  
足利官濃山口の茅檐の下に於て之を書す)」と書かれてい  
るからである。

また、ヲコト点の附いた三百年あまり前の鈔本に関して

は、現在所在のわかる三十六本のうちのヲコト点の附いた鈔本に相当するかもしれないが、別の鈔本である可能性も否定できないので、文明十四年本を除き、残りの二本を所在不明の鈔本とする。

二十三 戸水寛人蔵本

十卷 五冊 每半葉九行 每行二十字

法学博士戸水寛人蔵本で林泰輔『修訂論語年譜』（国書刊行会 昭和五十一年一月）四九五頁に見える。

二十四 吉田氏文淵閣蔵本

吉田久兵衛の堂号「文淵閣」、屋号「朝倉屋」といわれる書肆の蔵本であった。長澤規矩也「論語義疏伝来に関する疑問」（『漢学会雑誌』第一卷第一号 昭和八年九月、のち『長澤規矩也著作集』第七卷 汲古書院 昭和六十二年六月所収）に見える。

二十五 李盛鐸蔵本

明治三十一年（一八九八）から明治三十四年（一九〇二）まで公使として日本に滞在した李盛鐸（一八五八—一九三七）の『木犀軒収蔵旧本書目』に「論語義疏十卷 日本鈔本」と見える。彼が日本滞在中に入手したものと思

われる。帰国する際に持ち帰ったかどうかは不明である。彼の蔵書の多くは、いま北京大学図書館に蔵されているが、この鈔本は見当たらない。

二十六 土井晩翠蔵本

武内義雄『論語之研究』（岩波書店 昭和十四年十二月、のち『武内義雄全集』第一卷所収）四九頁に

仙台土井晩翠氏所蔵に之（足利学校所蔵『論語義疏』—引用者注）と同紙墨と思はれる皇侃義疏の卷首一冊があつて、その終に「大永四季（季Ⅱ年の誤り。引用者注）之夏於野州足利之傍写之畢」と記してゐる

とある。大永四年は西暦一五二四年。土井氏の蔵書は昭和二十年の仙台空襲で約八割が焼け、残りが東北大学附属図書館の晩翠文庫に収められているがこの鈔本は見あたらない。

二十七 両足院本

高田宗平『日本古代『論語義疏』受容史の研究』（塙書房 二〇一五年五月）六十頁に

建仁寺の塔頭両足院の蔵書目録である『建仁寺両足院蔵書目録』に、「論語義疏写 一」と著録されることから、両足院で調査を実施したが、残念ながら、該本の存在を確認することができなかった。云々

とある。

その他、

・安井小太郎「常陸久慈郡の某寺奈良の一寺院にも皇氏本論語ありと聞けり」(『東亜学会雑誌』第一篇第六号「論語皇侃義疏十卷」明治三十年七月)

・国立国会図書館蔵『論語集解』十卷一冊本(WA 16-19)巻首の「論語発題」最後部にある「九華洛東福寺講僧吾時皇侃疏不載邢昺正義本見之也(九華、洛の東福寺にして侖吾を講ずる時、皇侃疏に邢昺正義を載せざる本、之を見ると也―原本の訓点に従い、多少補って読んだ。九華は足利学校第七世座主。引用者注)などの伝聞に近い記事は省略に従った。

以上、所在不明の鈔本は、現在までのところ二十七本ほどあることが知られた。所在の判明している三十六本と重複がないように注意を払ったが、それでも情報量が少ない

鈔本は、あるいは現在目睹し得るものと同一の鈔本である可能性も皆無とはいえない。また、二十七本の中でさえ同じ鈔本があるかも知れないのである。

三十六本は盈進齋本と市島本を除き、みな邢昺の疏が書き加えられている。邢疏のない二本も、江戸後期の筆写であり、邢疏を省いて写したものと思われる。

いずれの日か、邢疏の無い旧鈔祖本『論語義疏』が出現すること祈って、一旦筆を擱くことにする。

(かげやま てるくに・実践女子大学教授)